



TITLE:

価値の量

AUTHOR(S):

恒藤, 恭

CITATION:

恒藤, 恭. 価値の量. 経済論叢 1923, 17(6): 765-788

ISSUE DATE:

1923-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128103>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

號六第 卷七十第

行發日一月二十年二十正大

論叢

土地課稅新案 法學博士 神戸 正雄

價値の量 法學士 恒藤 恭

世界經濟の意義 法學士 作田 莊一

鎌倉時代の土地制度 文學博士 三浦 周行

時論

農民土地愛着心冷却の傾向 法學博士 河田 嗣郎

震災と租稅 法學博士 小川 郷太郎

說苑

マルサスの地代論に就て 經濟學士 谷口 吉彦

雜錄

アダム・スミスの書簡一通 法學博士 河上 肇

「資本と勞働」と「勞働と資本」 法學士 山口 正太郎

リカアド經濟論文集の刊行 經濟學士 谷口 吉彦

名士の死の心理に關する統計的研究 經濟學士 岡崎 文規

附錄

本誌第十七卷總目錄

價 値 の 量

恒 藤 恭

一 價値の判斷

何等かの與へられた對象甲がAなる價値を有するといふことの認識に吾々が到達する過程の最も普遍的なる形式は、次の如くである——先づ吾々は、甲なる對象の存在を認識する、次に、甲なる對象において、Aなる價値概念の下に包攝され能ふやうな、aなる價値内容を觀照する、そしてこのaなる價値内容がAなる價値概念に包攝されるべき表象たることを意識する、終りに吾々は、甲なる對象はAなる價値を有するといふ判斷を下す。勿論、心理的には、aなる價値内容が先づ意識され、次いでAなる價値概念へと注意が向ひ、更に一轉して、aなる價値内容の支盤たる甲なる對象の存在が認識され、かくして甲なる對象はAなる價値をもつとの判斷が成り立つ場合もあれば、aなる價値内容が意識されるや、甲なる對象の存在の認識がそれに次いで生じ、續いてaなる價値内容とAなる價値概念との關係が意識に上せられ、その上で甲なる對象はAなる價値をもつといふやうに判斷される場合もあるであらう。唯論理的順序を模範的にあらはす心

理的過程をとり來るならば、初めに述べたやうな形式を示すであらうと、言ふに止まる。この場合に、aなる價値内容があたへられてゐるといふことが意識されるのは、既にリツカートが謂ふやうな所與性の範疇が適用されてゐるものだとも考へられるであらう。¹⁾すなはち單にaなる價値内容が觀照されてゐるといふだけであつては、aなる價値内容があたへられてゐるといふ立言は、意味を成さぬと、考へられるべきであり、吾々が所與性の範疇にしたがつて判斷することにより、初めてaなる價値内容は、認識の世界にその頭角を擡げるのであると、言ふべきであるかも知れない。そして其れから後、あたへられた内容がAなる價値概念によつて規定されるに至る以前に、先づあたへられた内容が價値の範疇の支配に服することが、必要とされるであらう。²⁾けれども此れらの關係は、姑く之を考慮の外に措くこととして——個々の現實の場合において、甲なる對象がAなる價値を有するといふことが、認識されるのは、既存のAなる價値概念に依つてのみ可能とされるのである。すなはち根本においては、價値の認識も、存在の認識と同様に、認識素材の普遍化の方向をたどりつつ出發するのである。

價値の認識を志す限り、思惟は、自己の活動の普遍的制約を守つて、概念による對象の規定を念としなければならぬ。價値の世界は、何よりも先づ個性的内容を以てみたまはれた世界であるといふにも拘らず、思惟がこれに向つて自己の領域を開拓せむとする以上、その任務の至難たるこ

1) cf. Rickert, Gegenstand der Erkenntnis, 4. u. 5. Aufl. 1921, S. 326 ff.

2) cf. Simmel, Philosophie des Geldes, 3. Aufl. 1920, S. 5 ff.

とは言を俟たない。しかもこの至難の任務が、何等かの程度において遂行され得るのでなければ、価値の世界の扉は吾々の理解力の前に固く鎖され、その内面の消息は永久の秘密として封緘されるであらう。けれども吾々は、思惟が不充分ながらも価値の世界の開拓に成功することを、知つてゐる。おそろくこの成功は、極めて貧弱な程度のものであり、価値の世界の内奥は、到底概念的認識の窺ひ見ることを許さぬ境地たるものと、言ふべきであるかも知れぬが、思惟と雖も、己れの方の企及し能はぬことを成就せむとするのではなく、己れの方を以て贏ち得た所を以て足れりとするであらう。³⁾ 価値の内容を體驗することが、吾々の日常生活にとつて極めて直接普通なる事實でありながら、之を概念的に認識することの極めて困難たるのは、精神生活に伴うて現れる所の多くの矛盾的事實の一例である。森嚴にして簡素なる社殿の境域に立つ者の多くは期せずして、『なに事のおはしますかは知らぬともありがたさにぞ涙こぼるる』なる感懷を禁め得ないであらう。その際、彼は自己の體驗せる『ありがたさ』の何たるかを全然知らないのではなく、あたへられたる価値内容を認識の手段によつて把握すべき事を知らないのである。そして価値内容の非合理性が思惟に向つて提起するところの抵抗の絶大なることの意識が、かへつて彼をして『ゆゑ知らぬ涙』にくれさせるのである。しかもそれと同時に、『ありがたさにぞ涙こぼるる』と自覺するとき、彼はみづからの體驗の事實を価値概念によつて認識せむとしてゐるのであり、

3) cf. Messer, Einführung in die Erkenntnistheorie, 2. Aufl., S. 24 ff.

彼の意識せるありがたさの由て来る所以を知らず、且つその有りがたさの内容をより精密に規定するすべを知らない迄もが、その内容のありがたさを『ありがたさ』として規定することにおいて、彼はまさに價値判斷を問題としてゐるのである。

甲なる對象はAなる價値を有するといふ判斷は、Aなる價値が價値であるといふ思想を前提する。従つてこれらの二つの命題からして、甲なる對象は價値を有するといふ判斷がみちびき出され得る。右に擧げた例における『ありがたさ』の判斷は、或る社殿の境域の一劃が宗教的價値をやとしてゐることを表白するものであり、謂ふ所の有りがたさは、特定の種類の有りがたさを意味するものと、考へられてゐるが、一層漠然と、又は一層抽象的に——例へば年老いたる名人の舞ひの一さしを觀て、その藝術的價値を鑑賞するといふよりは更にとりとめのつかぬ、しかし十分に緊張した心持で——『ありがたい』と言説するとき、吾々はその一さしの舞ひを以て單に『價値あり』として判斷するのである。その際、斯かる判斷から、價値の個性的内容の把握に向つて一步を進めるときは、藝術的價値内容の判斷が問題となり、かくして次第により特殊的なる價値内容の判斷が問題となるであらうが、或る對象が一般的に價値ありとされる場合、すなはち特定の對象において價値一般が顯現されてゐることの認識される場合のあることを、特記しなければならぬ。同じやうな一般さにおいて、或る事物について、『ありがたくない』といふ判斷、すなはち其

事物において反價值一般が顯現されてゐることの判斷の下される場合も亦可能たるであらう。論理的に見れば、甲なる對象がAなる價值又はA'なる反價值を有するといふ判斷は恒に、當然に甲なる對象が價值又は反價值を有するといふ判斷を前提するのであり、あらゆる個別的なる價值判斷は、A又はA'の内容が無限に特殊化されることによつて成り立つのである。

甲なる對象がAなる價值又はA'なる反價值を有すると判斷された場合に、價值A又は反價值A'は、道德的、宗教的、美的、理論的價值等種々なる特殊の價值概念を意味し得るわけであり、これらの價值概念の助けをかりて、甲なる對象において觀照される價值内容a又は反價值内容a'が道德的價值内容たり又は宗教的價值内容たることが、認識されるのである。勿論、甲なる對象が、道德的價值を有すると同時に、宗教的價值、美的價值をも合せ有することが、認識される場合もあれば、甲なる對象が一方には道德的反價值を有しつゝ、他方には美的價值を有すると認識される場合とか、一方には理論的價值を有しつゝ、他方には宗教的反價值を有すると認識される場合も可能である。更には、甲なる對象が、宗教的價值及び美的價值を併せ有すると認識されるのみならず、宗教的價值と美的價值との和を以てしては盡くし得られぬ所の、宗教的—美的價值ともいふべき、綜合的な價值を有するものとして認識される場合もあり得るのである。⁴⁾而して甲なる對象が宗教的價值又は美的價值を有すると認識される場合にも、單に宗教的價值一般又は

4) 田村徳治氏著、思想財産の移入の原理、108-109頁参照

美的價值一般を有するとして認識される場合もあれば、進んでA又はB又はCなる宗教的價值、L又はM又はNなる美的價值を有するとして認識される場合も存する。そして更にAなる宗教的價值を有する對象甲、又はLなる美的價值を有する對象乙についていふ所の宗教的價值A又は美的價值Lは、より特殊的なる價值概念によつて一層詳細に規定され能ふのであり、斯かる過程を反覆することにより、或る對象の有する價值は、漸次に、その特有の内容においてより精密に認識されるわけである。かやうな價值の認識の企てにおいて、判斷の對象たる價值が、いかなる種類の妥當性を有するものとして視られてゐるかに隨つて、判斷の妥當性をその者も亦おのづと影響を被る場合が多い。素より價值判斷と雖も、普遍妥當性を具備することを期待しなければならぬが、判斷されるべき價值が、普遍妥當性を有するものとして視られてゐる場合には、これに關する價值判斷その者が、普遍妥當的たり得るためには、多大の困難に打ち克たなければならぬのが、通常である。之に反して判斷の對象たる價值が、單に社會的妥當性又は個人的妥當性といふやうな經驗的妥當性を有するものとして視られてゐる場合には、其れに關して普遍妥當的な價值判斷を獲得することは、比較的容易たるべく、殊に價值判斷を下す主觀が、己れみづからに對してのみ妥當するものとして視られた價值に關して判斷する場合には、その判斷は最も容易に普遍妥當性を具へ能ふであらう。かくの如く價值判斷が普遍妥當的たり得ることの難易の程度は、價值その

者の妥當性如何により一樣でなく、價値の種別を異にするに由つても種々たるべきことが考へられるが、一般に價値判斷は普遍妥當性を具有し能はぬと思惟すべき根據は、之を求めることを得ない。素より正しき價値判斷はその前提として、あたへられたる價値内容を十分に觀照する意識のはたらきを要求するのであるが、かやうな前提のみたされてある場合にも、一般に價値的内容を規定し把握するに必要又は適切なる概念又は用語の甚だ乏しいことは、價値判斷に對して障礙を成すものであり、殊に價値判斷が、價値内容の比較的に普遍的なる性質の規定から進んで、次第により特殊的なる性質の規定に向ふにしたがつて、この困難は著しき加速度を以て増大するのである。かくて固有の價値的概念の外に、さまざまの存在的概念が、象徴的、比喩的、暗示的等の方法において使用されることにより、わづかに價値判斷の目的が不十分ながらも達せられるのである。必竟は、感情的、意志的意識内容の表象が價値表象の核心的成分を構成することが、かやうな特別の困難を惹起せしめるのに外ならぬ。

二 價値の量の概念

一般に價値は質的内容の外に量的内容を有する。¹⁾ 價値に關して下される判斷を、廣義における價値判斷とよび、價値内容に對して質的规定を加へむとする判斷を、狹義における價値判斷とよ

1) Meinong, Psychologisch-ethische Untersuchungen zur Werth-theorie, 1894, S. 73.

ぶときは、廣義における價値判斷の中には、價値内容に對して量的規定を加へむとする判斷も包含されるであらう。あらゆる量は、相互に他の量と關聯することによつてのみ、みづからの内容を保有するものであるが、價値の量も亦必然に他の價値の量との關係において成り立つ。今AとBとは、同一種別に屬するところの二個の相異なる價値であるとする。甲なる對象がAなる價値を有し、乙なる對象がBなる價値を有することが、認識された場合に、價値Aは價値Bに比して、より高いとか、より大であるとか、より優つてゐるとか、より豊かであるとか、又は前者は後者に比して、より低いとか、より小であるとか、より劣つてゐるとか、より貧しいとか云ふ様に判斷されるとき、斯かる判斷はいづれも價値A並びに價値Bの量に關して或る規定をあたへむとするものである。甲なる行爲は、乙なる行爲に比して、より高い道德的價値を有するとか、前者は、後者に比して、より善であるとかいふやうな判斷や、或る日の會合における丙なる樂人の歌唱は、同じ會合での丁なる樂人のそれよりも、一層魅力に富んでゐたといふやうな判斷も、同一の意味をもつ。これらの判斷は、一般に價値が、何等か量的概念によつて規定され能ふところの内容もしくは屬性を有するものであり、二個以上の價値が相互に斯かる量的内容もしくは量的屬性において比較され能ふことを、豫想するものである。同一の事柄は、反價値についても主張し得られるのであつて、たとへば、Aなる宗教的反價値の量aは、Bなる宗教的反價値の量bよりも大であ

るとか、小であるとか、又は相ひとしいとかいふやうな判断が行はれるのである。

吾々が現實に價值又は反價值について量的なる規定を加へる場合は少くない、而してさうした規定により、價值の内容に關する何等かの理會を獲得することも、明白である。しかしながら價值は、物理的に又は心理的に實在するところの對象と同一の意味において量もしくは大きさを有するものではない。²⁾ 價值の量といふときは、吾々が價值を觀照する場合に意識するところの感情なり欲望なりの強度もしくは烈度が連想され易いが、價值の量と、感情もしくは欲望の烈度とは、別個の概念である。³⁾

妥當性は價值の本質的屬性の一つである。妥當する所のものは價值に限られてゐるといふことは能きぬけれど、價值にして妥當性をそなへぬものはない。⁴⁾ 而して妥當する所のものは、必ずや何等かの形式において且つ何等かの内容において妥當するのであり、價值も亦一定の形式と一定の内容とにおいて妥當するのであるが、價值の量的規定は、妥當する内容に關するものであつて、妥當する形式に關するものではない。⁵⁾ 價值には無制約的に妥當するものと、有制約的に妥當するものがあり、前の種類の價值はあらゆる主觀に對して必然的に妥當するに反し、後の種類の價值はさうした普遍妥當性をもたない。しかも價值は普遍的に妥當するの故を以て、しからざる價值に比して、より大なる量を有するものではなく、單に前者は後者よりも一層高級なる形式にお

2) Kraus, Theorie des Wertes, 1901, S. 24-25.

3) Urban, Valuation, 1909, p. 73.

4) Rickert, *ibid.* S. 229 ff.; derselbe, System der Philosophie I, S. 1921 S. 121. ff.

5) 左右田博士は數學的概念を利用することにより、先驗的價值の妥當性形式に對し極めて透徹せる考察を加へて居られる。同博士著、文化價值と極限概念、第二編參照。

いて妥當するに止まるのである。價値の量は、その妥當する内容に關するといつても、價値内容の質的特有性に關するものではない。たとへば、莊嚴、雄大、豪宕、壯麗といったやうな價値的概念によつて規定される價値内容と、繊細、可憐、清楚、優婉といったやうな價値的概念によつて規定される價値内容との間には、何等か量的規定を聯想せしめるやうな相違が存するのであるけれども、この相違は飽くまでも質的相違であつて、量的相違ではない。この場合に量的差別が思ひ浮べられがちなのは、價値の支盤の實在的形態に量的相違の存することに胚胎するのである。或ひはまた價値の量は、價値の内容の複雑性と單純性との相違に關するものでもない。例へば綜合藝術の價値内容は、單純藝術のそれに比して遙かにより複雑なるを通常とするが、その事は、前者の價値の量の後者のそれよりも豊富なることを保證しない。あらゆる量が、さうであるやうに、價値の量も亦相互的關係において成り立つものであり、若干の價値が互ひに聯結して一個の系列又は體系を形成する處にのみ、各個の價値は一定の量を有し能ふのである。⁶⁾ 妥當するところの價値内容の間には、何等かの質的差異が存するのみならず、その特殊の内容において妥當する程度の差異が存するのであつて、これに基いて、同一種別に屬する一切の價値は、一個の系列の裡に順次に相隣りして位置され得るといふ本質をそなへてゐる。⁷⁾ 價値の量的規定とはかやうな系列における個々の價値の位置の規定をいふものに他ならぬ。

6) Simmel, ibid. S. 39-40.

7) Lessing, Studien zur Wertaxiomatik, S. 21.

價値の量は——フランツ・ブレンタノの言ひ表はしに従ふならば——價値にそなはる „Vorzeichenheit“ である。A なる價値は B なる價値よりも大なる量を有するといふ判斷は、判斷主觀が B なる價値よりも A なる價値を „bevorzugen“ することを意味する。あらゆる價値の量の相違は、一の價値が、他の價値に比して、より好もしきものとされる所から發生するし、あらゆる反價値の量は、一の反價値が、他の反價値に比して、より好もしからずとされる所から發生するのである。

【註】ブレンタノは、吾々が價値に關して „Bevorzugung“ を行ふ場合を三つの種類にわかつてある。第一は、吾々が、何等か善なりと認識された形のものな、何等か惡なりと認識された所のものに比して、より好もしとする場合である。第二は、善なりと認識された所のものゝ存在を、その不存在に比して、より好もしとする場合である。吾々が、それ自らの純粹さを保つてある所の善なるものを、同一の善なるものが惡なるものと混じてゐるのに比して、より好もしとする場合、又は善なるものを交へてゐる惡なるものを、同一の惡がそれ自らの純粹さを保つてゐるのに比して、より好もしとする場合、この第二の場合に屬する。第三は、一の善なるものを、他の善なるものに比して、より好もしとする場合である。一の善なるものが他の善なるものの一部分たるわけではないけれど、あらゆる點について前者が後者の一部分にひこしい場合はこの第三の場合に屬する。例へば、或る人が同一の繪畫に面して立ち、初めにはその全畫面を觀、次には、全く同一の姿勢に於いてではあるが、唯畫面の一部分のみを觀るとする。この場合には、初めの觀照は、後のそれに比して、より好もしとされるのである。また、一の善なるものと他の善なるものとが——たとへば、一の悦びと他の悦びとが——その他の關係に於いては全く同様でありながら、前

8) Franz Brentano, Vom Ursprung sittlicher Erkenntnis, herausgeg. von Kraus, S. 24.

者の強度が後者のそれよりも大きい場合には、前者は後者に比して、より好ましきとされるのである。(ibid. S. 247 ff.)

同一種別に屬する一切の價値を、その „Vorzüglichkeit“ 如何にしたがつて配列することは、事實的には到底企及し得べくもないけれど、論理的には可能たるものと、言ひえられるであらう。⁹⁾斯くて、或る一個の價値より出發して „vorzüglicher“ なる價値へと順次に進み行くときは、終極において無限大の „Unvorzüglichkeit“ を有する價値に到達すべく、反對に „unvorzüglicher“ なる價値への方向を最後まで窮めるときは無限小なる „Unvorzüglichkeit“ を有する價値に到達するであらう。そしてこの系列は其末端において、價値量零の點に接續するものと、考へ得られるであらうが、その點の反對の側から、反價値の系列の極小限が始まり、反價値の系列は反對の方向へと限りなく延長し、反價値の極大限につきるといふやうに、考へられるであらう。A なる價値の量と、B なる價値の量との差異、又は A' なる反價値の量と、B' なる反價値の量との差異は、A 及び B、又は A' 及び B' が、それらの屬する特定の價値系列又は反價値系列において、相互の關係においていかなる位置を占めるものであるかといふことによつて發生するのである。すなはち α なる價値系列において、A は B よりも一層極大限に近い位置を占めるものであるときは、A は B よりも大なる價値量をもつと判斷されるし、 α なる反價値系列において、A' は B' よりも一層極小限に近い位置を占めるものであるときは、A' は B' よりも小なる價値量をもつと判斷されるわけであ

9) 從つて茲にいはゆる „Vorzüglichkeit“ は論理的意味において理解されることを要する。

る。そして同一種別に屬する二個の價值もしくは反價值について、その量の大小を判斷し難いといふのは、右の如き價值系列又は反價值系列における二者の位置を、相對的に定め難いことを意味するのである。

價值Aが價值系列 α の極小限から距たつてゐる間隔と、反價值A'が價值系列 α の延長線の上に立つ反價值系列 α' の極小限から距たつてゐる間隔とが、相ひとしい長さをもつときは、價值Aの量aと反價值A'の量a'とは相ひとしい。この場合にaをマイナスaとして表明することも爲し得られるであらうが、存在するものとしての内容Aの量aに對してマイナスaなる量を考へるときは、マイナスaなる量はaなる量の不存在又は缺如を意味するのであり、従つてaとマイナスaとの和は、零となるのであるけれど、價值内容Aの量aに對して、反價值内容A'の量マイナスaを考へるときには、マイナスaなる量は、aなる量の不存在又は缺如を意味するものではない、従つてaとマイナスaとの和は、當然に零となるとは考へられない。若し此場合に、aとマイナスaとの和が零となるといふやうに考へるとすれば、その意味は存在する内容の量aと、存在せざる内容の量マイナスaとの和が、零となるといふのは、全く異なる意味を有するのでなければならぬ。價值Aの量aが本來積極的な大きさをあらはすやうに、反價值A'の量a'も亦本來積極的な大きさをあらはすものである。これらの二つの量は、嚴密には、相殺されることも能き

ねば、加算されることもできないものであるけれど、何等かの見點から互ひに相殺せしめ従つて特別の意味をもつ量としての零を求めることは、可能たるのである。たとへば善に強いと共に惡に強いといふやうな型の或る人の一生涯を通じて、その人の行爲の道德的價値の量と道德的反價値の量が相匹敵するとする。この場合に、價値と反價値とをして相殺せしめるならば、零といふ結果を獲るであらう。更に道德的に見て極端に沈香も焚かず屍もひらず底の生涯をすむた人があるとする。この人の生涯において實現された道德的價値の量も道德的反價値の量も、ほとんど零にひとしいとする。しかるときは、前の人と後の人とについて、ひとしく零なる價値量が獲られた事となるが、前後の場合において、同一の量零が意味する所は、著しく異なるといはねばならぬ。唯若しも例へば、現世における善行惡行の割合如何により、人の來世における運命が定まるといふやうな、一定の宗教上の見點が立てられるとすれば、右の両者はほゞ同一の運命を來世においてさづけられるものと判斷されるであらう。又例へば、快樂主義の人生觀をとる哲學者が人生のあたへる快樂と苦痛とを比較し、兩者の量は相ひとしく、従つて人生は價値と反價値との等量を提供するとの理由の下に、人生は必竟無意義であると判斷したとする。之と異つて、一切の現象を假幻的と觀、従つて眞實なる意味において價値も反價値も成立し得ないと思惟する哲學者は、最初から人生を以て無意義なりと判斷するであらう。これらの二つの判斷によつて表

白される人生觀の内容は著しく相ことなるものであるが、例へば其れによつて指し示される實踐的態度は著しく相似たるものがあるであらう。

三 價値の量的規定

價値の量については、量一般に關する論理的法則が妥當する。¹⁾ 例へば、價値Aの量がaであり價値Bの量がbであるときは、aとbとを合せた量は、a又はbのいづれよりも大である。また反價値Aの量がa'であり、反價値Bの量がb'であるならば、a'又はb'はいづれもa'とb'との和よりも小である。この場合に、aとbとの和はcなる量を形成し、a'とb'との和はc'なる量を形成するとしても、cなる價値量又はc'なる反價値量からして、cなる價値又はc'なる反價値を想定し、價値Cの量は價値Aの量又は價値Bの量よりも大であるとか、反價値C'の量は反價値A'の量又は反價値B'の量よりも大であるとかいふやうに判斷することは、意味を成さぬ。何となれば、價値又は反價値の量は、數學的意義における量と同一の性質を有するものではなく、後者に觀られるやうな連續性が前者には缺けてゐるために、二個の價値又は反價値を合一することにより、それらの價値又は反價値の量の和と相等しい量を有する價値を成り立たしめることは、不可能だからである。一般にABC D ……等の價値を包含する價値體系N又はA'B'C'D' ……等の反價

1) Lessing, *ibid.* S. 26ff.

値を包含する反價値體系 N' は、その一部分を構成する若干の價値に比して、より大なる量を有する。だから例へば甲なる彫刻家の作品 α にそなはる美的價値 A の有する量 a と、乙なる彫刻家の作品 β にそなはる美的價値 B の有する量 b とを合せたものは、 α の價値量よりも、 β のそれよりも大であるし、乙なる背教者の冒瀆行爲 κ に付着する宗教的反價値 K の有する量 k 、又は丙なる無神論者の冒瀆行爲 ι に付着する宗教的反價値 L の有する量 l は、いづれもこれらの二個の行爲の反價値の量の和よりも小である。個々の價値又は反價値は、その部分よりも大なる量を有する。但し甲なる對象が A なる價値を有する場合に、甲なる對象の部分乙の有する價値 B は、必ずしも價値 A よりも小なる價値をもつと限らぬ。例へば或る樂曲の一部分だけを分離せしめて之を演奏するときは、その全體を演奏するときに比して、反つて大なる音樂的價値を實現する場合もあり得るのである。價値 A の量 a 及び價値 B の量 b が、共に價値 C の量 c にひとしい場合には、 a と b とは相ひとしく、 a と b との和が、 c よりも小である場合には、 a 又は b は、いづれも c よりも小である。又價値 B の量 b が價値 A の量 a よりも小であり、價値 C の量 c が b よりも小である場合には、 c は a よりも小である。

價値の量は、價値の顯現を可能ならしめる支盤たる所の實在的要素の量とは同一でない。だから同一の種類の價値 A 及び B の支盤たる實在的要素 M 及び N が、各自 m 及び n なる量を有する場合

合に、 m が n より大であるとしても、必ずしも價值Aの量 a が價值Bの量 b より大であるとは限らない。例へば、甲なる繪畫の畫面の面積 m が、乙なる繪畫の面積 n よりも大であるとしても、甲の價值の量 a が乙の價值の量 b よりも大であるとは限らない。或は甲なる繪畫の價值がAなる質的内容を a 量だけ有する場合に、それと同一の價值内容を有する繪畫を、甲よりも小なる畫面の上に成り立たしめたとして、このより小たる畫面を有する繪畫乙の價值量は、 a よりも小であるとは限らない。また例へば、長篇小説の價值量と短篇小説の價值量、長時間にわたる樂曲の演奏の價值量と短時間に終了する樂曲の價值量、永き生涯を通じての信仰の生活と或る短き期間における信仰の生活等といったやうな對照において、價值の支盤の要素の量の大小と、價值の量との間に、何等の一義的平行關係も存しないことが知られるであらう。價值が顯在の狀態にある時間の長短も亦、價值の量の大小と關係のないのが通常である。たとへば、天上の虹のうつくしさは、たとへそれが十分、二十分、又は一時間と保持されたところで、その量を増すことなく、美的趣致に乏しい建築物は千年の久しきにわたつて存続するとしても、寸毫もその價值を加へないであらう。又價值の量は、必ずしも價值の觀照に際して主觀の意識のうちに生ずる感情の動搖の度と比例するものではない。この點については、單なる官能的快感又は不快感の提供者たるの故を以て價值又は反價值ありとされる對象の場合には、その價值又は反價值の量は、官能的

- 2) この場合と前掲二五頁の註に引用したブレンダノの所説における繪畫の觀賞の場合とは區別されねばならぬ。
- 3) 幸福や官能的快樂價值の場合には、價值の存立の時間の長さは、概して價值の量を増大せしめるであらう。勿論いはゆる效用遞減の法則などがさうした關係において問題とされるであらう。

快感又は不快感の量と比例するのが、普通であるけれど、かやうな個人的妥當性を有する價值とは異なつて社會的妥當性もしくは先驗的妥當性を有する價值にあつては、價值感情の強度と價值の量との間に對應關係を求めることは、むしろ原則として不可能である。

一の價值の量と他の價值の量とを比較することは、両者の種類及び質が同一なりと認識される限りにおいてのみ可能である。一般には、同一の種類に屬し、同一の質的内容を有する二個以上の價值についても、その量を比較して大小を判定することは、多大の困難を伴ふものであり、すぐれたる評價能力を以てしても不可能なる場合が多いのである。だから價值の量の相違が著しい場合においてのみ、吾々は比較的に確實に二個の價值の量の大小を判斷することが能きる。たとへば悟道に徹した師僧の心境は、公案の解決につまづく若僧の念慮に比して、より高き宗教的價值ありとされるであらうし、プラトーンの哲學の體系は、ソフィスト某のそれに比して、より大なる理論的價值ありとされるであらう。大義親を減すといふやうな價值判斷は、二個の抽象的價值概念の比較に立脚するものであるが、いかほど多くの場合において、人は斯かる抽象的規準にしたがつて、現實の生活における二個の行爲方法の道德的價值の量を比較したであらうか。現代の英國の議會政治と日本のそれとを比較するとき、何人も前者の價值の後者にまさることを認めるに躊躇しないであらうし、比例的所得税の制度の價值は、累進的所得税の制度のそれに若かぬこと

も、大多數の人々の承認する所であらう。同じやうに反價值についても、その相違の大なる二個以上の價值量に關しては、比較的に確實な判斷を下し得るのであるが、さうでない場合においても、吾々はさまざまの方法によつて、異なる反價值についてその量を比較せむとする傾向をもつてゐる。

甲なる對象がAなる價值の實現のために役立つの故を以てBなる價值ありとみとめられる場合には、AはBとの關係において自存的價值たり、BはAとの關係において倚存的價值たるのである。⁴⁾ 論理的に見て、自存的價值たるAは倚存的價值たるBよりも大なる量をもつ。同様に、乙なる對象がA'なる反價值の實現に役立つの故を以てB'なる反價值ありとみとめられる場合にはA'はB'に對して自存的反價值たり、B'はA'に對して倚存的反價值たるのであり、B'はA'に比してその量が小である。⁵⁾ たとへば、或る宗教的信仰の立場からして、道德的行爲は宗教的價值の實現の手段としてのみ價值あるものと考へられる場合には、道德的價值の量をいかほど合せて見ても、つひに一個の宗教的價值の量に及ばない。そして反對に、百千の不道德的行爲によつてつくられた道德的反價值の量の和も、到底それに基づいて惹起せしめられた宗教的反價值の量に達することはない。甲及び乙なる對象が同一の價值Aの實現のために役立つの故を以て、それぞれB及びCなる價值を有する場合に、甲は乙に比してより良くAの實現に役立つとすれば、Bの量はCの量より

4) cf. Aristoteles, Nicomachean Ethics, transl. by Chase, p. 1096b; Ehrenfels, ibid. S. 115 ff.
5) cf. Simmel, ibid, S. 229 ff.

りも大である。丙及び丁なる對象が同一の反價値¹⁾A'の實現のために役立つの故を以て、それぞれB'及びC'なる反價値を有する場合に、丙は丁に比してより良くA'の實現に役立つとすれば、B'はC'よりも大なる量を有する。

四 價値の量の問題と經濟價値

量的概念によつて爲される認識は、存在する事物に關しては、價値の場合とくらべて、遙かに廣汎なる適用範圍を有するのみならず、その使命を成就し得る程度も比較にならぬほど大きい。かの自然科学的認識の如きは、その最も典型的なる例である。しかも自然科学的認識が、いかほど實在の量的普遍化に成功したところで、到底數學的認識がその領域を完全に支配する際までは、到達し得べくもないのである。完全なる同質性と連續性を併せそなへた内容を以て充されてある數量の世界においては、いかなる個別的、特殊的對象の内容も、普遍的法則によつて規定され能はぬものではなく、一切の特殊的なるもの内容は、洩れなく普遍的なるもの内容にまで還元され得るのである。¹⁾しかるに一步自然科学的實在の世界に入るときは、普遍對特殊の關係はその趣を一變する。此處では、經驗的なるものが思惟の合理化の作用に向つて提起する抵抗が、その世界のいかなる部分にもみなぎりわたつて居り、自然法則の普遍化的把握力の強大なるを以

1) cf. Kant, Kritik der reinen Vernunft, S. 527ff. (Erdmanns Ausgabe, 6. Aufl.)

てしても、この經驗的なものの抵抗を如何ともすることができない。たとへ一切の現象の間に成り立つ因果關係を、精密に量的に規定し得たとしても、普遍的法則からそれらの個々の因果關係の内容をみちびき出すことは、到底不可能の事に屬する。量的内容の世界と質的内容とを距てる、深淵は永久に兩者の合一を妨げるのであり、いかほど抽象化されたる質的内容との關係においても、量的規定は必竟その象徴的意義を脱却し盡すことを爲し得ない。まして文化科學的實在の世界に入るときは、思惟の合理化の作用は、頓にその威力を失墜せざるを得ない。この世界における一切の對象にまつはる文化的意味内容は、量的規定を忌避することにおいて、遙かにその程度を加へる。勿論、文化の世界においても、普遍化的認識、殊に量的規定の比較的に効を奏する部分から然らざる部分へと、漸次に非合理性を異にする内容の層が重なり合つてゐる有様は、あだかも自然の世界において、純粹なる數量の世界に最も接近せる部分から、次第に合理性の稀薄な内容を以てみたされた部分へと、内容の層が續いてゐるのと、照應するのである。

實在の世界を去つて、價值の世界に入るときは、思惟の合理化の作用は、絶大なる抵抗に會するのである。この世界においては、思惟の努力は、むしろ滑稽とも見えるほどに、其成功の程度がたより無い。恐らくこの世界は感情や意志やの支配に委ねて置く可き筈のものであつて、異端者ともいふべき思惟が其處で活動を試みることは、僭越な所爲であると、考へられるかも知れない。

い。殊に量的概念を以て、價値の内容を規定せむとするやうな仕業は、笑ふべき愚擧とせられるであらう。しかしながら價値の世界も亦著しく複雑なる構造を有するのであつて、概念的認識が比較的効果を收め得る部分も亦存する。殊に量的概念による認識の成功し得る程度の比較的に大なる部分と、然らざる部分との分布は、一様でない。先驗的妥當性をそなへた價値を先驗的價値と名づけ、さうでない價値を経験的價値と名づけるときは、量的概念が先驗的價値の世界に對して規定を加へることの能きる程度は、甚しく制限されてゐるに反し、経験的價値の世界については、かなり大なる程度において量的規定が効果を收め得るのである。個々の價値内容が果して先驗的妥當性を有するか否かといふことの判斷は、經驗的にあたへられた如何なる標準によつても統整し能はぬ所であり、斯かる判斷を正しく下すことは、すでに著しく困難なる事柄であるが、二個の價値がいつれも同一種別の價値として先驗的妥當性を有するといふ判斷が、正しく下されたと假定したところで、そのいつれが他に優つてゐるかといふことの判斷に至つては、その正しい遂行は極めて困難であると言はねばならぬ。之に反して經驗的價値については、或る對象が特定の種類の價値を有するか否かは、經驗的にあたへられた何等かの標準に照らして判定し得られる問題であり、比較的に容易に且つ確實にその解決を期し得るばかりでなく、同一種別に屬する價値を相互に比較して、その量を規定することも、或る程度において經驗的標準に訴へて企て能ふ所である。たとへば個人的經驗的價値としての官能的快樂價値とか、社會的經驗的價値

としての政治價值とか、法律價值とか、經濟價值とかについては、價值内容の量的規定の及び得る程度はかなり大きい。殊に經濟價值の場合においては、他の經驗的價值の場合とは比較にならぬ程にも、量的規定がその威力を發揮することは周知の事實である。

質的概念による價值内容の規定は、——若しも價值内容を以て一の圓形を成すものと構想するならば、——この圓の外周より出發して螺旋狀を成しつゝ、漸次に圓の中心へと近づいて行き、以て價值内容の中核に迫到せむとするといふやうに、喩言することが、能きであらう。素よりこの場合に、概念的思惟が螺旋的進行を終了して價值内容の中核に到達することは、つひに不可能なるものではあるけれど、その進行が價值内容の中核の周圍を絶えず廻轉しながら、しかも次第に中核を目指して之に接近せむとする傾向を有するものであることは、認められるであらう。しかるに量的概念による價值内容の規定は、右の圓の外周その者に沿うて廻轉するか、又はその内側において外周に平行しつゝ、廻轉するものとも謂ふべく、その廻轉の進行は、毫も價值内容の中核に向けられてゐない。唯規定されるべき價值の本質に基いて、量的規定の廻轉の位置が漸次に價值内容の圓周の内側へと移行行くことが能き場合には、この意味においてその廻轉が中核に接近するに従つて、概念的認識は——依然として價值内容の中核へ方向からは逸れながらも——次第に價值内容のより大なる部分を支配し、合理化して行くのである。この點において、經濟價值は他の諸々の價值から原理的に區別され能ふとも言ふべきやうな特有の本質を有するので

ある。經濟價値においても、量的規定の進行方向が圓の中心をはづれて居ることに變りはないけれど、漸次に量的規定の廻轉の位置が、外周より遠ざかり中心に接近し能ふところの程度は、殆んど無限大であると言ひえられるのである。極端な言ひ表はしをすれば、經濟價値の場合には、最後の一點としての中心に、質的内容の非合理的成分を殘留せしめる外は、圓の内面における一切の成分をして量化し、合理化せしめ得ることも考へられるのである。かくて存在一般の世界において、數學的存在が占めるのに酷似した地位を、經濟價値は價値一般の世界において占めるのであり、一切の實在的存在が、數學的存在に對して有する關係に、彷彿たる關係が、他の一切の價値と經濟價値との間において觀取されるのである。經驗的存在の世界における諸々の現象が數學的概念によつて理會されるのは、數學的存在の世界を支配する法則を制約として理會されるのであるが、それと同様に、一般に數量的概念により何等かの仕方である價値に關する認識が企てられる限りにおいて、斯かる認識は、經濟價値の世界を成り立たしめる數量的關係の理會によつて制約されるとすらも、言ひ得られるであらう。勿論、數量的概念による價値の規定が、多くの場合において極めて皮相的な理會をあたへるにすぎないことは、明白であるが、その點は思惟の能力の限界にかへりみて、已むを得ぬ事柄と視なければならぬ。而して經濟價値をはじめとして種々の經驗的價値が、各自の本質に基いて、いかなる仕方である程度において量的規定に服するかといふ問題は、別個の立場からより詳細に考察されなければならぬことは、言ふ迄もない。